

特集

教室を飛び出そう

図工・美術新発見



本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

はじめに

「forme」は広く現代社会の要求に応える美術教育の理論と実践の紹介を目的として一九五六年に創刊されました。美術教育に寄り添って刊行を続けています。「forme」という書名は造形と人間形成をシンボライズしたものです。子どもたちのための美術教育に取り組んでおられる先生方、美術や造形にかかわるすべての方々、そして保護者の皆様のために、これからも、よりよい美術教育を目指す道標となる内容を目指していきます。



表紙の写真より
外に出て何を見付ける？

Index No.315

- ③ 特集 教室を飛び出そう 図工・美術新発見
インタビュー 佐藤ねじ、林 文二
現役クリエイターの「〇〇(まるまる)カ」
- ⑧ そぞろみ部
|第7回|橋 文:市川寛也 イラスト:今井未知
- ⑫ 学びのフロンティア(小学校)
布でつくる、一瞬のかたち 中原靖友
- ⑭ 学びのフロンティア(中学校)
折り紙でつくるアイヌ文様 寺田 実
- ⑯ 子どもの絵の見方
|第3回|考える 奥村高明
- ⑱ 村上センセイが行く! 全国美術室探訪
|第3回|中野区立第五中学校 花里裕子
- ⑳ 場の設定
|こんな授業を試みた| 長澤博昭
- ㉑ ミュージアム・エデュケーションのトピラ
宮城県美術館 細谷美宇
- ㉒ ラフスケッチ
|第5回|和歌山県立神島高等学校 松下莉子さん
- ㉓ インタビュー
木下栄三
- ㉔ まず見る
|第18回|画面(フォーマット)から考えてみる 成相 肇
- ㉘ 創造のつばさを広げて
こども美術館 スカイミュージアムの取り組み紹介
- ㉚ 中美アプリ通信
インタビュー 川合克彦
- ㉛ ABC PICK UP
阿部宏行
- ㉜ 生徒作品解説 私の見方
中村美知枝



①子どもたちは、草木や生き物を見付け、触れ、全身の感覚を使いながら、季節の変化を感じ取っている。
(小学4年生 絵)



③作品を置く場所、背景に写り込むもの、光の当たり具合、撮影する角度……こだわりながら自分がいいと思う構図を見付けている。
(小学6年生 立体)



②その場所で見付けた枝とロープを使って、つなぎ方を試していけば、自分がいいと思う新しい形が生まれてくる。
(小学4年生 造形遊び)



④こども美術館 スカイミュージアムの企画「天王寺コマ撮りモンスター」に参加した中高生がロケハンをする様子。街を歩いて気になる場所を探し、そこに潜んでいそうなモンスターを想像してつくり、コマ撮りアニメーションに表した。



⑤暖かい日なた、建物の陰……お気に入りの場所を見付け、段ボールでもっと居心地のよい場所へとつくりかえる子ども。
(小学3年生 造形遊び)



⑥校庭で春を待つ冬芽を探し、じっくり鑑賞しながら、その場で想像を膨らませ絵に表す子ども。
(小学2年生 鑑賞)

アートディレクション：清水 一(東京矢印)
編集・ディレクション：山本武義(東京矢印)
デザイン：東京矢印
表紙タイトル：ムツロマサコ
表紙写真：①伊藤 萌(ゆかい) ②加藤 甫 ③池ノ谷侖花(ゆかい)
④有本真紀 ⑤川瀬一絵(ゆかい) ⑥ただ(ゆかい)

教室を飛び出そう 図工・美術新発見

体が動けば、視点が動く。視点が動けば、心も動く！

図工・美術で子どもに伝えたいのは、

「ものを見て」「世界に触れて」「発見する」ことの喜びです。

教室の中でイメージを膨らませる時間も重要ですが、

たまには教室を飛び出して、街や自然の中を歩いてみるはいかがでしょう。

学ぶ環境を変えることは、私たちの想像以上に子どもの心や価値観にゆさぶりを与えます。

今回の特集では、「歩く」「外に出る」ことをテーマに、

様々な表現者のアイデアや工夫を集めました。

子どもたちが外を歩く中で、自分だけの発見をするヒントとしてください。



子どもに見せながら話を聞かせていたときに、

でもらいたいですね。

僕の場合、よいアイデアはパソコンの前に座っている時よりも、外を歩いたり、現場に行ったりした方が生まれやすいんです。移動に伴って目に飛び込んでくる情報の量や質が、頭の刺激にちょうどいいのでしよう。

そこで得られた「気づき」をメモに採るのが重要です。自転車に乗っていたり、歩いていたりすると、せっかくなにかを思い付いてもそのまま通り過ぎてしまいますよね。でも、足を止めることで新しく見えてくる風景があるの、できるだけけいと呼吸おいてメモを採るようにしています。

「これって絵本みたいだな」とメモをしておきました。貯めておいたアイデアの種を作品化するには、物事の定義を考え直すことから始めます。「路上えほん」の場合、絵本の要素を「絵」と「本」というように分解して、「絵本は何をもって絵本となり得るか」を考えました。散歩での体験から、「絵本の絵は本の中にある必要はない」というアイデアに辿り着きました。そこで、路上の郵便ポストとか、木とか、ゴミすらも絵本の「絵」に見立て、そこにスマホで入力した文字をモバイルプロジェクトで投影すれば、散歩道がそのまま絵本になるというのが「路上えほん」のコンセプトです。

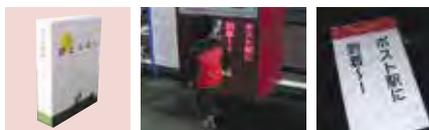
さとう
佐藤 ねじ

アートディレクター・
プランナー

教室を出て、
自分だけの小さな発見を！



(*1)



路上えほん 2014
デジタルえほんアワード2014 企画部門 審査員特別賞
道にあるすべての風景を「絵」に見立て、そこに親が物語となる「文字」を投影し、子どもと歩きながら、物語を読み聞かせていく、あたらしい絵本体験です。
<https://blue-puddle.com/works/rojyo-ehon/>



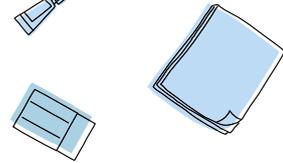
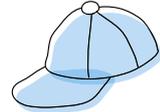
佐藤 ねじ
アートディレクター・プランナー
1982年愛知生まれ。株式会社ブルーパドル代表。

「空いてる土俵」を探そうというスタイルで、WEBやアプリ、デバイスの隙間表現を探求。東京TDC賞2016、RGB部門入賞。代表作に「Kooci」「しゃべる名刺」「レシートレーター」など。日経BPより「超ノド術」を出版。
<http://www.nezihiko.com/>



現役クリエイターの「○○カ」

プロとして表現活動を行う
イラストレーター、美術家、写真家たちは、
どのように街や風景を捉え、
自身の表現活動に生かしているのでしょうか。
ここでは、ジャンルや制作スタイルの違う5人のクリエイターが、
それぞれ得意とする街や風景の見方や
発想を「○○カ」として紹介します。



札幌大通公園にて [ペン・水彩・紙 / 31×41cm] 2001

教室を出て、昼休みの公園で、スケートボードで遊ぶ人をスケッチするとします。ペンを手に「動く」人物を目で追ってみますが、そのカタチをなかなか捉えられません。絵を描く上で、大切なのは観察、つまり対象への目の付けようですが、「動くもの」の

なが さわ
永沢 まこと
イラストレーター

「**眼力**」
「**一瞬の動きを捉える**」

見方には特別なコツがあります。この場合は、目を動かすことを止めて、ゆったりと構え直します。公園全体を、静かにポーズと「眺める」ようにします。やがて落ちていて広がりのある視野の中に、「動く」人の姿がクッキリと見えてきます。目を動かさない方が、動くものがよく見える、というフシギです。

これを、ペンの軽やかな線で描き取ると、自分でも驚くほど、いい「動きポーズ」がスケッチブックの上に描き出されます。



永沢まこと
イラストレーター
1936年東京生まれ。学習院大学卒。

アニメーターとして活動ののち1978年渡米。NY在住中に線描による独自のスケッチスタイルを確立。その後は世界各地を旅して、主に都市と都市人間を描き続けている。著書「絵を描きたいあなたへ」、「永沢まことのどっておきスケッチ上達術」。
<https://makoart.exblog.jp>

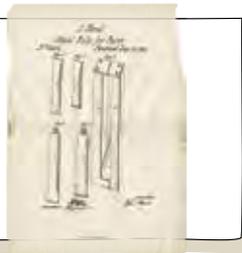
COLUMN 001

チューブ入り油絵具と印象派の誕生

今では戸外にイーゼルを立て油絵を描く光景は当たり前のものですが、印象派以前、絵画はアトリエ内で完成させるものでした。扱いにくい油絵具を戸外に持ち出す手段がなかったのです。その制作スタイル

を大きく変えた要因の一つに、1840年代に開発されたチューブ入り油絵具があります。チューブ入り油絵具を片手に画家たちはアトリエを飛び出し、刻々と変わりゆく光の美しさをキャンパス上に捉える実験的製作を謳歌したのです。

鋳製油絵具チューブの特許書類(部分)▶





岩田とも子
アーティスト
1983年神奈川県生まれ。
東京藝術大学大学院修了。

身近な自然物の観察・採集から宇宙的なサイクルを体感するような制作をするアーティスト。生き物に対する素朴な視点、そこから始まる学びと表現を大切にしている。
<http://shizenkansatsu.net/>



東京都美術館 企画展
「キュッパのびじゅつかん
—みつめて、あつめて、しらべて、ならべて」
ひろってはたどるような部屋 より/ 2015
撮影:加藤 健

いわ た こ
岩田とも子
アーティスト

断片から
ストーリーを紡ぐ
「物語力」



何かを地面から拾い上げたり、切り離したりした時点で既に物語は始まっている。

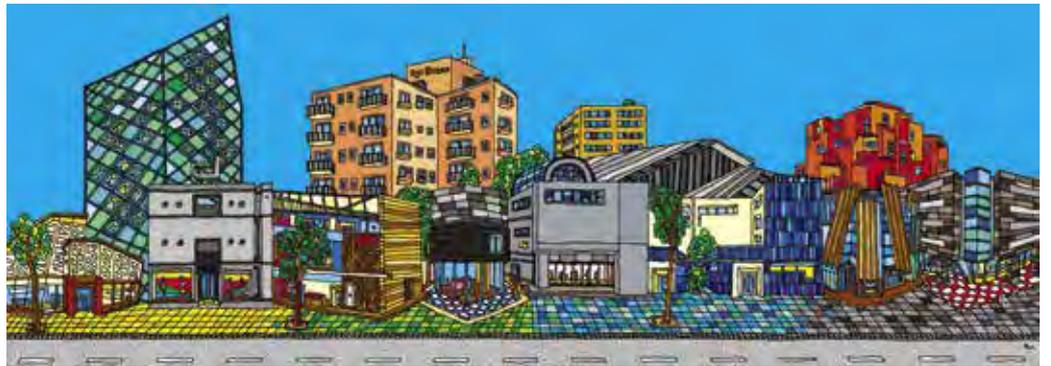
例えば落ちていた石ころ。いつ石になっただけからその地面にあったのか想像するだけで手の上の石は特別な拾い物になる。その手元の物語は観察することで転がっていく。石をよく見ながらその石が岩だった時のことを描いてみたり文章にしてみたり。そのうち他の石のことも気になってきて地面の上を歩き回り始める。

私はある島へ行つて一カ月ほど自然物を拾っては部屋に並べていたことがある。石はもちろん、石より変化が激しい植物、形や色にルールがありそうな貝殻、鳥の羽など。私はそれらに囲まれながら思い付いたアイデアを島の人たちに語ることにした。季節を航海する船の話だ。その部屋は船室で自然物は船の積み荷。その話を聞いた島の人々は船員となって一緒に自然物を集め始めた。物語が転がっていく瞬間だった。



いた だに りゅう いち ろう
板谷 龍一郎
画家

記憶で再構築する
「デフォルメカ」



Minami_Aoyama [Inkjet Print on Paper / 21X60cm] 2014



板谷龍一郎/画家
1974年大阪生まれ。
慶應義塾大学商学部卒、
Central Saint Martins College
of Art and Design卒。

大阪からロント、東京、ロンドンでの生活を経て、現在はベルリン在住。「街」「自然」「モノ」をシリーズとした作品を制作。国内外において作品を発表し、広告などのコミッションワークも多く手掛ける。
<http://ryuitadani.com/>

街を歩くと気になる建物があります。誰もが知っている有名な建築物であったり、名もないビルであったり(実際のこの建物にも名前はありません)が、撮った写真を眺めます。頭の中で自由に街を再構築し、その街の「顔」を思い浮かべます。
いつのまにか建物の並びや大きさ、色は、実際のそれとは異なるものになりますが、あるべき街を再現するのではありません。自分の思い浮かべる「街のポートレート」を描いていきます。東京であれば、鼻が東京タワー、両目は六本木ヒルズタワーとミッドタウンタワー。そして口は……と考えていたら、東京という街の顔が見えてきます。
大きな街にも小さな町にもその場所をかたどる建物や気になる建物はあるものです。自由に眺めて組み替えるうちに、その街らしい「顔」が浮かんでくるかもしれません。



やまもと まりえ
山本 麻璃絵
彫刻家

現実を異化する
「ユーモア力」



ものモノ#自動販売機 [アクリル絵の具・構 / 185×120×70cm] 2010



山本麻璃絵 / 彫刻家
1988年東京生まれ。
武蔵野美術大学大学院美術専攻彫刻コース修了。

身近なものをモチーフに、木彫で制作・発表をしている。主な個展は「-windows shopping-」、「ものごころ展」など。第14回岡本太郎現代芸術賞特別賞を受賞。
<http://yamamotomarie.nomaki.jp/>



人間は道具を使う生き物ですから、たくさんものものに囲まれて生活しています。そんなものをモチーフに、木彫で制作をしています。

日本は自動販売機がとても多い国です。たくさん自動販売機に囲まれて生活していて、利用することに慣れていくためにその大きさに対する感覚が麻痺しているように思います。

自動販売機の正確な形ではなく、大きさや存在感をつくりたいと思います。

た。なので木が持っている形を真っ直ぐに矯正する必要はないと思いがたつくっていったら、少しゆがんだ形になりました。中の缶やペットボトルも、本物の飲み物でなくなると購入者の視線と違う目線になり、色や形、それぞれの個性が見やすくなります。

観られる以外に役割を持たない木彫によって、改めて周りのもの、の大きさや形、存在感を感じてもらえたいです。

ほんじょう なおき
本城 直季
写真家

疑ってみる
「疑問力」



「small planet」東京 [発色現像方式印刷 / 120×150cm] 2005



本城直季 / 写真家
1978年東京生まれ。
東京工芸大学大学院芸術学研究所メディアアート専攻修了。

4×5判カメラを使用して人物や風景などをミニチュアのように撮影する独特のスタイルを確立。写真集多数刊行のほか、雑誌や広告など幅広い分野で活躍。写真集「small planet」(2006)で第32回木村伊兵衛賞受賞。
<http://honjonaoki.com>

私たちの生活は共通認識を前提にしている、学校や本でそうした知識を身につけます。「疑問力」常識を問いただすことは、得た知識を実践レベルにステップアップさせる第一歩です。

私の写真は当たり前の風景を疑うことをテーマとし、その手段として風景をミニチュアのように撮影します。撮影ポイントは、周辺に面白いものがあるか確認しながら、登れそうな高い場所を探します。

所を探します。被写体を上下にばかし、なるべく俯瞰から風景を撮りますが、この時、人や車、電車などの人工物を入れると、一層ミニチュア感は増します。

一見、不自然に感じるかもしれませんが、人間の視覚はピントの合う範囲に限られるので、全体に焦点が合った一般的な風景写真より、実は私の写真の方が実際の見え方に近いのです。疑問力により、いつもの風景を「虚構の町」に似せながら、そこに都市の持つ「本質」を浮かび上がらせています。



COLUMN 002

民衆とのふれあいで生まれた仏像

江戸時代の修験僧である円空は、修行を終えた後、北海道、東北地方への旅行を皮切りに、岐阜を拠点に中部、近畿、関東の各地に生涯を通じて行脚を続けました。円空は各地で「円空仏」と呼ばれる荒々しい木彫り

の仏像を彫り、その土地の寺社や個人宅に贈られました。現在、5000体以上が発見されていますが、実際には10万體以上彫ったと言われています。行脚先で出会った人々との交流の中で彫られ、贈られた仏像ですから、今でも根強い人気を誇っているのかもしれない。

円空仏 ▶



造形的な見方・考え方を養い、
自分から価値を
つくりだすためのヒント

路上観察の達人に聞く！

はやし じょう じ
林 丈二

イラストレーター・エッセイスト・
明治文化研究者

目立たぬものが放つ 「弱い光」を捉える



(*2)



(*3)

地図を片手に街をしらみつぶしに歩き、独自の視点で面白いものを発見する——そんな路上観察の達人が、今回登場いただく林丈二さんです。林さんの代表的な著書『マンホールのふた(日本篇)(*)』は、日本全国の「マンホールのふた」を撮影してまとめたものであるが、一体なぜマンホール……？ 素朴に生じた疑問を林さんに尋ねました。

「マンホールへの興味は、磨耗した鉄の表面がキラリと光ってきいだと感じたのが始まりです。興味の方向が変化したのは、北区のマンホールに『荒玉水道(*2)』の文字を見付けたことでした。文字が右から左へ書かれた古いものですが、『荒玉水道』とは何だろうと。すぐに図書館に行つて調べたところ、荒玉水道が関東大震災後に設立されたといった歴史が浮かび上がってきた

のです。『マンホールのふた』に歴史が隠れているという発見に興奮しましたね。そういう視点でマンホールを見ていくと、当然、地方ごとに歴史がありますから、全国のマンホールを見て回らなければと(笑)。しかも、マンホールは古くなれば取り替えられてしまうので、うかうかしていられないわけです」と林さんは当時を振り返ります。

林さんは、マンホールの他にも「狛犬の尻尾」「駅の白線」「靴底にはさまった小石(*3)」など、人が見向きもしないような、しかし林さんの手にかかると思わず笑ってしまうような調査を地道に続けています。その独自のアンテナはどこを向いているのでしょうか。

「元来、僕は目立つものより、目立たないものが好きなんです。ポスターなど、目立つものは強い光を放っているもののような印象を受けますが、その光はあえて気付かれようように誰かが操作していることが多く、つまらない。僕が面白いと思うのは、目立たないけれど弱い光を放っているもので、こちらから光に気付いてあげる喜びがあります。



林 丈二
イラストレーター・エッセイスト・明治文化研究者
1947年東京生まれ。武蔵野美術大学卒業。



(*1)

1986年「路上観察学会」発足時には発起人の一人として参加。調査マニアで、どんな瑣末なことにも探究の目を向け丹念にデータをまとめる。著書に『マンホールのふた(日本篇)』※左写真(サイエティスト社、1984年初版)、他に『イタリア歩けば』『犬はどこ?』『猫はどこ?』『明治がらくた博覧会』など。

外に出るときの「便利グッズ」



①カメラ／Canon PowerShot SX530 HS
軽量のデジタルカメラは街歩きの必需品。「カメラを持っていると、面白いものを見付けようという心構えになるのがいい」と林さん。



②地図
拡大コピーした地図を持ち歩き、歩いたルートは色ペンで塗りつぶしていく。

③スニーカー
1日に3万歩を歩くこともあるので、マメができないように、足にフィットするウォーキング用のスニーカーを用意。中敷も必需品。

④メモ帳
写真が撮れないシーンはメモ帳の出番。これまで100冊を超えるメモ帳が残っている。

⑤メジャー
最近は持ち歩いていないが、マンホールの大きさや駅のホームの白点線の長さを測ったりすることで、意外な発見の手がかりになるのだとか。



そぞろみ部とは・・・

街をそぞろ歩きながら身の周りのあれこれを、造形的に捉え直すったり系部活動。

ここでは、部長と副部長がそれぞれの視点で切り取った形や色を「言葉」と「イラスト」でレポートしていきます。

今回の舞台は東京都の東部を流れる隅田川。古くから水運の要として親しまれたこの川には、江戸時代からの伝統を受け継ぐ「千住大橋」をはじめ、いくつもの個性豊かな橋が架かっている。それらの中には浮世絵などの題材として描かれているものも少なくない。改めて橋の造形に着目するとどのような発見があるのだろうか。足立区、荒川区、墨田区、台東区の境界をそぞろ歩いた。



部長 / テキスト担当

いちかわひろや
市川寛也

東北芸術工科大学芸術学部専任講師。妖怪研究者。各地で「妖怪採集」と称する街歩きを実践中。主な著書に「怪異を歩く」(共著、青弓社、2016年)。

第7回
橋

そぞろみポイント

構造に基づく形と色

橋は基本的にこちら側と向こう側をつなぐという明確な目的を持った建造物である。とは言え、そこを渡るのは歩行者だけではない。自動車、電車、水……それぞれの役割に応じた形がある。千住大橋駅に集合した一行が歩き始めて間もなく、一本の橋が目に入った。周りはフェンスで囲まれていて入ることはできない。少し引いてみるといくつもの配管が渡されているようだ。そこを何が通っているのか想像してみるのも面白い。その少し下流には「千住水管橋」という銘板の付いた太いパイプ。名前に照らし合わせてみるのも一興だ。例えば「白髭橋」。二つの橋脚を結ぶアーチを軸に、橋の両端に向かうならかな曲線は白く塗装され、白髭の名にふさわしい。もちろん、川に架かっているものだけが橋ではない。車道の上を通る「うめわかばし」は一見すると橋だと気付かない平坦な立体交差。その向こうに見える団地の渡り廊下も橋の仲間？ 重なり合う橋が生み出すダイナミックな都市空間にも注目したい。

そぞろみポイント

眺めたり見上げたり

大きく湾曲した隅田川沿いを歩いていくと少しずつ橋の全体像が見えてくる。それぞれの間隔も遠すぎず近すぎず絶妙だ。渡る前には必ず全体のシルエットを眺めてみる。アーチがある橋は角度によって印象も大きく変わる。真横から見ると単調でも、斜めから見るといくつもの直線が交差して複雑な幾何形体を形づくっている。中にはアーチを持たない橋もある。「千住汐入大橋」もそんなフラットタイプの一つ。この場合は近付いても見え方はあまり変化しないが、下に入り込んで裏側を観察すると、並行していくつものパイプが走っていることに気付く。ところどころに雨どいのようなものもある。これらは恐らく見せるためのデザインではない。暮らしに必要なライフラインが収納された合理的な形態である。無機質な地下空間をのぞいているような感覚。遠くから下から、視点を変えて見ることで一本の橋にも様々な表情がある。

そぞろみポイント

端々に目を向ければ

橋を歩いて渡ってみると、細々とした造形も目に入る。まずは橋の入り口に立っている欄干に注目。「千住大橋」はその歴史を物語るように重厚なつくり。渋い青色をした「水神大橋」の欄干は波の形を模している。歩道の手すりもちょっとした水上ギャラリィ。欄間のように透かし彫りが施されていた。富士山、桜、水神(?)……キラキラと反射する川の水面を借景にすることで図像が完成する。歩行者専用の「桜橋」は両岸に二か所ずつある入口が中央部でつながるX型の形状が特徴的。ちょうど桜が満開だったため、橋の上から写真を撮る人々も目立つ。歩いているだけでは橋の全貌を目にすることは難しいが、周囲にはその形を模したフェンスもある。橋単体ではなく、景観も含めてトータルでデザインされている。最後に渡った真つ赤な「吾妻橋」のたもとでは「復興完成記念」※と刻まれた石碑を発見。建造にかけた人々の願いが目の前の景色につながっていることを改めて認識した。

※1923年の関東大震災からの復興。



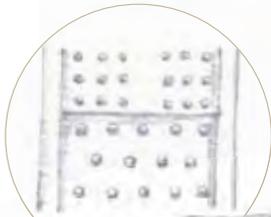
副部長 / イラスト担当

いまいみち
今井未知

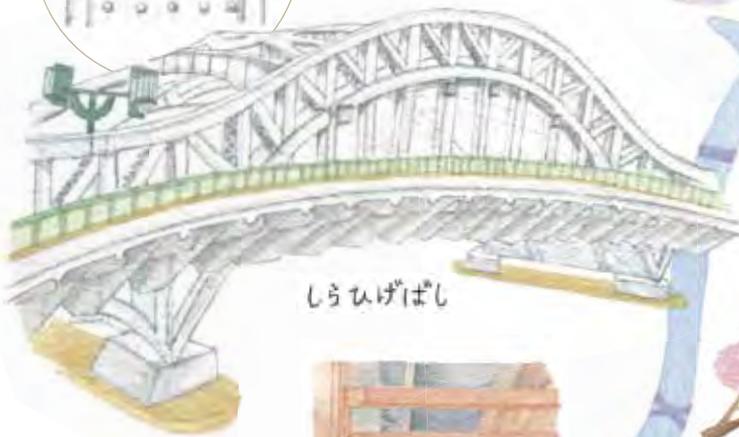
イラストレーター。女子美術短期大学造形学科(当時)卒。
パリのアトリエ・コントルポワンにて銅版画を学び
2000年よりフリーのイラストレーターとして活動。



せんじゅおおはし



すいじんおおはし



しらひげばし



せんじゅしかいりおおはし



まくらばし



さくらばし



水辺の風景には数字が多かった



布でつくる、 一瞬のかたち

何度も見直し、
自分なりの答えを見付け出す



群馬大学教育学部附属小学校の中原靖友先生は、布と液体粘土を使って「かたちを探ること」「自分で決めること」を重視した授業を行いました。子どもたちが主体的に、何度もかたちを見直して、表現の楽しさを実感する——。その「場と材」のつくり方について、詳しくお話をお聞きます。

群馬県 群馬大学教育学部附属小学校

なかほら やすとも
中原 靖友 先生

かたちを探し、決める楽しさ

この題材では「布」と「液体粘土」を使いました。全四時間の授業の中で、タオルを思い思いのかたちに変え、また乾燥させた後は視点を変えながら、自分にとつての「いいかたち」を探します。「ここだ！」と決めたところで台に固定し、アングルを決めて、カメラで撮影を行いました。

子どもたちが自分でかたちを見付けられるよう、導入には特に気を配りました。動物などの見立てだけにイメージを限定してしまわないよう、「何に見える？」ではなく、「これってどんな感じに見える？」「どこから見るといい感じかな？」といった、自由に想像を広げられるような問いかけをしまし



た。また、角度を変えて見せたり、乾燥用の箱にのぞき穴をつくって楽しんで見られるよう工夫することとで、「何度も見直していいこと」

や「角度や見方によって作品の印象が変わること」を伝えていきます。子どもたちからは「風を感じる」「春っぽい」などの感想が。みんな伸び伸びとイメージを膨らませていたようです。想像が十分に広がったところで、液体粘土に浸した布を成形していききました。

友達と鑑賞し、見方を深める

もっとも強く意識したのが、つくりながら何回も見直せるような「場」を設けること。まずは、乾燥した布を一斉に取り出して、自由に歩き回りながらわいわいと鑑賞する時間を設けました。箱の中から一斉に取り出すといういろいろな方向から作品を眺めたくなり、友達の作品がどのような形に固まっているのか見たくなります。こうして子どもたちが互いに感想を言い合いながら鑑賞することで、より面白い見方が見付かったり、想像を膨らませたりすることができま

仕上げ、撮影でさらに見直す

「色を塗って台に固定する」「カメラで撮影する」ことでも見直すす

指導計画

鑑賞の能力

友人の作品から、見立ての面白さや見せ方の工夫を感じ取っている。

創造的な技能

見る人にも伝わるように、作品を固定する角度や色、置く場所を考え、工夫している。

発想や構想の能力

固まった形をいろいろな高さや方向・角度から見、つくりたいものを見付けている。

造形への関心・意欲・態度

液体粘土で固めた布の形の高さや膨らみの変化により、布のつくりだす形の変化を楽しもうとしている。

主な評価の観点

- 感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことから、表したいことを見付けて表すこと。
- 形や色、材料の特徴や構成の美しさなどを感じ、用途などを考えながら表し方を構想して表すこと。
- 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法を組み合わせて表すこと。

主な学習内容

学習目標

液体粘土で固めた布の形を見立てたり、形を生かしたりしながら、想像を広げて立体に表す。

材料・用具

段ボール箱、洗濯ばさみ、棒針金、紐、ペットボトル、瓶などの容器、風船、ニール袋、布、タオル、液体粘土

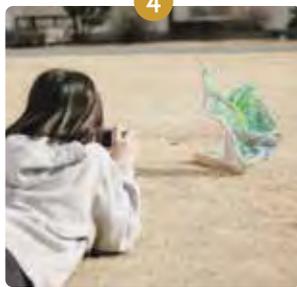
領域

A 表現(2)・B 鑑賞

時間

四時間

一瞬のかたちができるまで



4 台に固定した作品を撮影します。何度も置き場所や背景、角度を変えつつ、こだわって撮影する子どもたち。



3 箱から取り出した瞬間に歓声！友達に自慢したり、感想を言い合うことで、新たな驚きや発見が見つかりました。



2 離れたところに材料置き場をつくりました。材料を取りに行く時間が、友達の作品を見たり、自分のかたちを見直す機会になります。



1 箱の中で完成イメージを予測しながら布のかたちを変えていきます。試行錯誤を繰り返して、自分にとっての理想のかたちを模索。

Message

今回の授業は「自分で決める力」を身に付けてほしいと思い実践しました。自分で決められる子は、人が決めたことを大切にできる。違いを認め、よさを発見し、協働することができると思っています。また、すべての授業で、「自分にはないものに会おうことを楽しむ」「驚きを楽しむ」ことを大切にしています。楽しいから学びが進み、楽しいから協働が生まれ、そして楽しいから困難にぶつかっても乗り越えていくことができると思うのですよね。図工はこうした「楽しさ」を、純粹に学ぶことが



今回の授業は「自分で決める力」を身に付けてほしいと思い実践しました。自分で決められる子は、人が決めたことを大切にできる。違いを認め、よさを発見し、協働することができると思っています。

図工を通して、前向きなエネルギーを！



きる教科だと思いません。一人一人が「楽しい！」を見付けられたら、きっと学校での生活や毎日の暮らしがもっともっと輝くはず。図工を通して前向きなエネルギーを生み出していけたら、こんなにうれしいことはありません。

機会をつくりました。

カメラは四、五人に一台用意。カメラが少ないことで待ち時間が生まれ、待っている間に友達の作品を見たり、自分はどう撮ろうかと見直す機会ができました。また、感想を言い合ったり、友達の撮影を手伝ったりといった協働が生まれ、さらに発想が膨らむきっかけに。寝転がって撮影したり、背景を気にしてみたりと、ファインダーを通して、様々な角度から「見る」ことを楽しんでいるようでした。

クラゲのようなかたち、滝のようなかたち、光のかたちや爽やかなかたちなど……。みな自分のイメージしたものを自由に表現し、その楽しさを味わっていた様子。何度も見直しながら、新しい想像が生まれる面白さを体感できる活動になりました。





折り紙でつくる アイヌ文様

異文化への
理解を深めるきっかけに



アイヌ民族について学び、慣れ親しんだ材料を使ってアイヌ文様の切り絵をつくる授業。
その進め方やサポートの仕方を先生に伺いました。
伝統と生徒の個性が共存するデザインはどのようにして生まれたのでしょうか。
ポイントとなったのは、制約と自由さのバランスでした。

北海道 札幌市立真栄中学校（実践時）

寺田 実 先生

アイヌ文様について知る

発想や構想の能力

アイヌ民族の伝統文化、「アイヌ文様」をつくる授業を行いました。技能を磨くことはもちろん、共に北海道に暮らすアイヌ民族をより深く知るきっかけにもなればと思つて選んだテーマです。

アイヌ文様は、「モレウ」（渦巻き）、「アイウシ」（とげの形）、「シク」（ひし形）といった形が組み合わさつてできています。生徒はまず、それらの基礎知識をワークシートに整理します。制作に夢中になると基本を忘れがちになってしまうので、いつでも立ち返れるようにするためです。

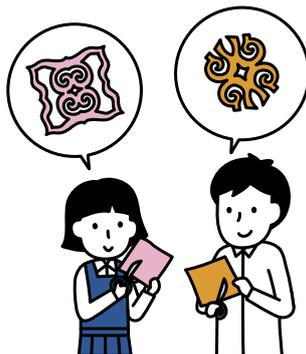
アイヌは文字をもたない民族であり、文様には「魔除け」「見守る」などいろんな意味が込められています。美しいだけでなく、コミュニケーションツールとしても優れたものであることを解説しました。



自分だけの文様をつくる

創造的な技能

文様づくりに使つたのは、身近な画材である折り紙。四つ折りなどに折つてから下絵を描いて切り抜き、それを開くと線対称の文様ができあがるという方法です。難易度を抑えることで、楽しみながら作品づくりに取り組めるようにしました。



意外だったのが、華やかな金色や銀色を選ぶ生徒がほとんどいなかったことです。理由を聞くと、「紙が使いづらいから」。扱いづらい紙質であることを、小学校までに体験していたのでしょう。

複雑なデザインの見本を見せて意欲を刺激しつつ、思い思いの文様をつくってもらいました。下絵を描かずに切ってみる子、開いたときの文様を先にイメージし、逆算して下絵を描く子など、進め方は人によって様々。作業工程を縛ら

指導計画

鑑賞の能力	創造的な技能	発想や構想の能力	美術への関心・意欲・態度	主な評価の観点	主な学習内容	学習目標	材料・用具	領域	時間
作品の交流や鑑賞を通して、造形的なよさや美しさ、作品の多様性を理解することも、自分の作品に生かすための視点を見いだそうとする。	折り紙の性質やよさの扱い方の特性などから文様の形や制作の順序などを考え、見通しを持ち、創意工夫して表現している。	条件を基に、美的感覚を働かせて構成を考え、形や色彩の効果に気付きながら表現の構想をする。	アイヌ文様を独創的に表現することに関心を持ち、主体的に表現しようとする。	アイヌ文様を独創的に表現することに関心を持ち、主体的に表現しようとする。	● 私たちが暮らす北海道とアイヌ文化とのつながりについて知る。 ● アイヌ文様を構成する形の特徴や意味について学び、同じ形を基に試作する。 ● 練習したものをより複雑な構成の作品を鑑賞し、それらを参考に思い思いの発想で構想する。 ● イメージに合う折り紙を選んで作品を制作し、その色に合う台紙に貼る。 ● お互いの作品を鑑賞し合い、アイヌ文様を制作して気付いたことをワークシートにまとめる。	アイヌ文様について学んだら、専用のワークシートに整理。ワークシートには授業中の気付きなども書き留めます。	折り紙、はさみ	A 表現(2) A	二時間

折り紙でつくるアイヌ文様ができるまで



最後に一つ作品を選んで台紙にのり付け。みんなの作品を掲示してそれぞれのよさを鑑賞します。

簡単な文様から始め、授業中に何度も試作を重ねることで、自然と複雑な文様へと変化していきます。

よくできた生徒の作品を随時黒板に貼っていくことで、他の生徒への制作のヒントに。

折り紙の色の面を内側にして、四つ折りにして切ります。折り山からはみ出す部分をつくと線対称の文様ができる。

アイヌ文様について学んだら、専用のワークシートに整理。ワークシートには授業中の気付きなども書き留めます。

Message

たものも、これまでの図画工作や、事前のレタリングの学習により「形の基となる美しい線」で表すという経験が活用され、深い学びが生まれたことがよかったですね。



アイヌ文様を題材に選んだのは、北海道で共に生きるアイヌ民族についてもっと知ってほしいと考えたから。

生徒たちには、アイヌ民族の歴史や暮らしについて話したうえで、文様づくりに取り組んでもらいました。授業の感想には「こんななすこいものが北海道にあったんだ」「アイヌ民族のすばらしさに気付いた」といったものも、これまでの図画工作や、事前のレタリングの学習により「形の基となる美しい線」で表すという経験が活用され、深い学びが生まれたことがよかったですね。

作品づくりの先に生まれた深い学び



子どもたちの成長は目覚ましく、たった一年でも積極性や技能はとんとん上がっています。ある授業で、納得いくレベルまで仕上げられず「悔しかった」と感想を書いた子がいました。それはきつと、目指すものがきちんとイメージできなくなったからだと思います。生徒たちがこれからのように変わり続けていくのが、楽しみです。

り過ぎないことで、自由な発想を引き出します。制作点数も自由で、授業時間内に十人以上つくった生徒や、「家でもっとやってもいいですか?」と折り紙を持ち帰る生徒もいました。

鑑賞の能力

自由な鑑賞会で見る力を養う

授業の最後にお互いの作品を鑑賞します。事前に伝えたのは、「粗探しをするのではなく、いいところを見付けよう」といった観賞のヒント。一人が感想を言い、

みんなが聞くのではなく、作品を掲示して自由に見て回るという形式を採用しました。その方が、自然に感想を言ってくれるのです。「このデザイン面白いね」「この形がすこい!」。あちこちで会話が生まれ、自分の作品だけでなくほかの人の作品のよさにも気付ける機会になりました。

二時間の中で、絵が得意な子ども、そうでない子ども達成感を得られる授業。一年生では、美術の面白さを感じてもらったことが特に大切です。身に付けた技能と自信が、二年生以降も積極的に学んでいくための活力になればと思います。



海？

泡？

深さ？

奥村先生の 子どもの 絵の見方

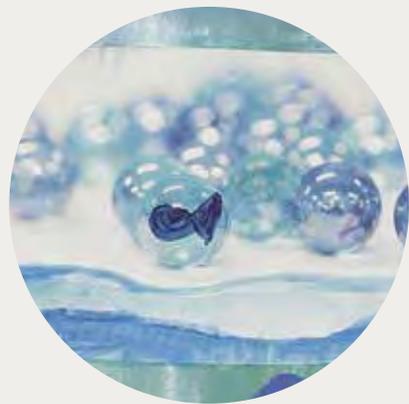


#3 考える

「子どもの作品を見る」とは、
作品から分かる事実と見る側の解釈の繰り返し、
子どものつくる過程やアイデアを追体験する作業、
言い換えればつくっている子どもに身を重なる行為です。

まずはタイトルを見ずに、作品そのものを見てみましょう。
青い絵です。ビー玉や魚、線などが描かれています。
作品を見るプロセスは、
作品に「近づき、たどって、考える」。
今回は「考える」、どこまで子どもに近づけるでしょう。

平成27年（2015年）度版 小学校図画工作科教科書5・6上 p.32・33
「まだ見ぬ世界」の授業実践より ※教科書には本作品は掲載されておりません。



たどる

青が全体に塗られた後にビー玉の写真が貼られています。その後に「魚」「波」「白い曲線」「泡」などが描き加えられています。画面の下半分は緑や黄色が、青の上に塗り重ねられています。光の違いや深さなどを表したかったのでしょうか。少なくとも描きながら途中で主題が変化したようです。



主題の変化？



近づく

真の端で切れているビー玉は丸くなるように描き加えられ、その隣の「青い丸」と一緒に、二つの青い流れの「波」の上に乗っています。画面全体に描かれた「青い丸」には白が加えられ、水の「泡」のように見えます。画面全体に走る「白い曲線」は水や「泡」の動きでしょうか。



子どもの話

- 1 心に引っ掛かる写真を探して、ビー玉の写真を見つけた。ビー玉の丸い形は落ち着く感じがするので、まず正方形の画用紙を選びました。
- 2 ビー玉の透き通る色がきれいだったので、画用紙にビー玉の色に近い青や白などを、チューブから直接落とし、ローラーで何度も塗って色を重ねました。色を全体に塗ったら、写真を画面のいろいろな場所に置きながら描きたいことを考えました。

「雨の日の水滴」 東京都目黒区立五本木小学校 五年生

- 3 ビー玉は「水」のイメージだったので青を塗ったのですが、空が広がる感じになったので、上は空、下は草原にしようと思いました。黄色や緑を使って草の感じを出しました。
- 4 写真のビー玉は少しぼやけているので、もっとはっきりした形があったほうがいいと思い、画面にいくつものビー玉を描きました。
- 5 「雨の日の水滴」という主題に変えて、水を強調するために、右方向から水の流れを描き、写真の上にもつなげました。白い線は、水滴から聴こえてくる音や風を表しています。最後に魚を一匹、写真のビー玉に描きました。

空

水滴

草原



まとめ



作品に「近づいて、たどって、考えたこと」と「子どもの話」を比べたら、ほんの一部しか分かっていなかったことに気付かされます。

青い丸は「泡」ではなく「水滴」でした。「白い曲線」は波の動きではなく、音や風でした。作者は目の前の画面と、その都度対話を繰り返しながら、主題を2、3度変化させていました。色づくり、構図、強調、バランス、新しい発想など、発揮された資質・能力も多様です。

絵から分かることはほんの一割程度です。子どもは本当にすごいことをやっています。このことを肝に銘じながらも、常に描いた子ども自身の視点から絵を見る努力は欠かせません。なぜなら、「子どもの話」を聞いたときに「ああ、そうか！ そうだったのか」と頷くことができるのは、子ども側から子どもの絵を見ている先生だけだと思うからです。

考える

描かれた事実から解釈すれば、ビー玉の写真から海をイメージし、それが主題になって、水の「泡」が画面全体に広がる絵になったのではないのでしょうか。何度も写真と絵を見比べ、同じ色になるように絵の具を調合したり、色のバランスや調和を考えたりしたことでしょう。はじめに思いついた主題は描きながら変化し、最終的に黄色や緑を加えてまとめています。色の知識や絵の具の技能、目の前の画面から生まれる思考や判断など、複数の能力が駆使されています。



▲美術室の後方は展示スペース。制作途中の作品からも、素材の扱い方に生徒の様々な気付きが感じられる。

村上センセイが行く!

キンコーン
カンコーン



全国美術室探訪

隣の学校は何をしているの?

中学校美術教科書著者である
村上尚徳先生が
全国の中学校美術室を訪問。
“村上先生視点”で、現場の工夫や
先生方の美術教育への思いに迫ります。



第3回

中野区立第五中学校 花里 裕子 先生

先輩たちの作品に刺激を受ける制作空間。
生徒の自由で主体的な創作活動を重視。

思わずワクワクするような
刺激に満ちた美術室づくり

村上今日は木彫小箱を制作する授業を見学させていただきましたが、使用する材料や技法、工作機器の多彩さに驚かされました。電動工具の種類も豊富で、生徒さんたちは生き生きと使っていましたね。
花里『木を楽しむ』をテーマにした三年生の授業です。基本は木材ですが、ガラスや金属、布、レジン、漆などの異素材を組み合わせたり、自由な発想で道具を選んで自分だけの箱を装飾しています。
村上教室や廊下に展示された生徒作品も圧倒的な数で、見ているだけで楽しくなります。

花里 誰もが美術室に入ったとき、思わずワクワクと何かつくりたい

はなざとひろこ
花里裕子

埼玉県川越市出身。目白研心高等学校でも非常勤講師を勤める。図工美術と地域をつなぐワークショップや実践が多い。美術教育ハンドブック(三元社)などに執筆。





▲亀
[アクリル絵の具、ニス、木/
5×24×23cm]



▲9年間の図工美術の集大成。
先輩たちの創意工夫とつくりかえる
プロセスに、生徒の発想力は刺激される。

▼電動イトノコ、ベルトサンダーなどの
多彩な工具と様々な素材が
すぐに手に取れるようにしてある。



▲生徒たちの憧れを題材に生かした
『私の空』。画用紙のサイズや描き方も
それぞれ異なる。

くなくなってしまう美術室を目指して
います。展示作品の中には卒業
生のものもありますが、作品には
作者の思いや制作ポイントを記
したコメントカードが添えられ
ていて、そのコメントも後輩たち
が自ら発想し、育てていくための
ヒントになっています。

生徒の心をつかむテーマで 心の中の「空」を自由に表現

花里 『私の空』という題材では、
自分の「心の中の空」を描きまし
た。心象風景なので、雲が浮かぶ
青空もあれば銀河が広がる空も
あります。

村上 それは面白いですね。

花里 生徒たちとの会話の中で、ア
ニメの背景画の美しさへの関心を
実感しました。そこで、私自身が商
業アニメーションの美術監督経験
を持つ奥井伸先生から背景画の描
き方を学び、その制作工程を動画
で見せました。両面をたつぷりと

水で濡らした画用紙にアクリル絵
の具で、にじみ、ぼかし、グラデー
ション、ドライブラシなどの技法
を用い、大きな刷毛を使って思い
思いに描いています。

村上 『私の空』というテーマがい
いのでしょね。様々な技法で心
象風景を描く題材はありますが、
テーマが抽象的すぎると生徒も偶
然性に頼ってしまい、題材の意図
を見失いがちになります。それに
対し、ここにある作品には、生徒
の思考や個性がしっかりと表れて
います。

花里 本校は「気付く・考える授
業」を重視していて、生徒の発想
や主体的な学びを大切にしてい
ます。また、地域の通りの壁画の
依頼を美術部員にいただいたり、
美術関連の資料や校内展示用の
美術作品を提供していただいたり
といった、地域の方々との本校の
美術教育に対する応援も、生徒が
安心して表現を楽しむ環境を支
えているのだと思います。

生徒をこまやかに観察し その個性と主体性を育む

花里 今の私は、同じ教材であって



も生徒一人一人がそれぞれ違った
方法で表現できる環境をつくりた
いと思っています。様々な課題に
取り組む中で、生徒の思考のプロ
セスを育てるには、もっと自由な
発想でいいんだと気付いたからで
す。学級担任や他教科の先生、小
学校の図工の先生たちとの交流が
できると、そこからクラスや、子
どもたちの楽しみ、不安なども分
かってきました。その感性を育む
場所として「美術室でしかできな
いこと」をやるうと思いました。

村上 確かにここは、美術室でしか
できないことであふれていますね。
花里 いつも彼らに言っているの
は、「美術室は君たちの制作空間。
自分のスタジオだよ」というこ
と。だから試行錯誤してもものづく
りをしていいし、完璧な計画は立
てなくていい。失敗して、そ
こから必要な知識と工夫を学ん
でこそ、生きた学びになると思っ
ています。

村上 素晴らしい考えですね。
花里 中学校は、中学生としての
青春を保証してあげる場所。安心
して生徒たちの心が熱中できる
場所でありたいと思います。

探訪を終えて…

中野区立第五中学校の美術室は心が躍る空間です。教室や廊下を彩る生徒作品は実に個性的で、創意工夫に満ちていました。生徒が自由に、主体的にものづくりに没頭できる教育環境は、生徒の心を豊かに育みます。その教育環境を実現するには、まず美術教師が柔軟な発想を持ち、学校や地域との信頼関係や協力関係を築いていかなければなりません。決して容易なことではありませんが、生徒が楽しく創作活動に打ち込み、自ら成長できる環境は、美術教育の可能性を大きく広げていくのではないのでしょうか。



むらかみ ひさのり
村上尚徳

岡山県出身。IPU・環太平洋大学副学長、次世代教育学部教授。岡山市立中学校教諭、岡山県教育庁指導課指導主事を経て、文部科学省教科調査官、及び国立教育政策研究所教育課程調査官。2011年より現大学に。平成20年の中学校美術、高等学校芸術(美術・工芸)の学習指導要領改訂を担当。現在、日本文教出版「中学校美術」「高校生の美術」シリーズ教科書著者。

対談の動画は
日文チャンネルでご覧いただけます。



美術の授業において教師はアドバイザーであり、コーディネーターであり、水先案内人であるとも考えます。この授業で、生徒はあるテーマのもと、自分で考えて創造表現の計画を立て、材料や素材、それらに応じて使う用具や技法を考えなければなりません。生徒の意欲を引き立たせる工夫をすることで、教室内に様々な状況が生まれ、互いに学び合い、刺激合う光景が生まれるのです。

主体的・対話的で深い学びのための

場の設定

こんな授業を試みた

文：長澤博昭ながさわひろあき（前 横浜市立芹が谷中学校長）
イラスト：にしほりみほこ



ごみの山が学びを力強いものに

材料や素材は市販のものに限らず、身の周りのものすべてが材料や素材でありヒントでもあります。ごみというとチョット抵抗がありますが、**廃品や何かの部品なども含めて材料や素材が身の周りにゴロゴロあることが、子どもにとって幸せな空間であることがあります。**廃棄扱いのパソコンを一台提供した時は、部品を取り出して自身の作品に活用する生徒と、その基盤自体のデザイン性から作品のヒントをつかんだ生徒がいました。木っ端や様々な大小の紙片、アクリル板なども、それぞれ箱に入れて教室の隅に設置しました。粘土も大きなバケツに放り込んでおき自由に使えるようにしました。この粘土は制作のためだけでなく、立体造形のヒントに使えるようにとたくらんだものです。**ごみが材料やヒントに見えるためには、教師によるある程度の分別が効果的です。**

思いを見とって用具を提供

用具についても、使いたい時に使える所にあるのが理想です。安全指導が前提となりますが、木工具やデザイン用品、共用の絵の具、接着のための材料や用具などは、教室内の棚や専用のラックにいつでも使えるように収納していました。時には表現に合わせて用具をつくることもありました。視点を変えると、「こんな用具があるなら、こういう表現も可能かな」という思考の流れがあるからです。例えば粘土を扱っているうちに模様を付けたくなった生徒が、既成のヘラでは物足りなくなり、用具を工夫する例は多く見られました。

生徒が何を表現しようとしているのかを見とり、対話しつつ授業を進めていると、生徒の「こんな表現をしたい！」にぶつかります。その思いを受けて、エアブラシからすぢちを取り出したり、烏口を持ってきたり、電動工具を提供したこともありました。



美術室は沈黙の指導

作家の部屋にコレクションが集められている光景を目にすることがあります。それはその作家の脳内の一部が表出しているように思います。美術室の使いやすさというのは、他の特別教室や一般教室とは違い、作家の部屋のような面を含んでいると考えます。**創造活動をする環境として、ヒントになるものが目に入るところにあることは、沈黙の指導とも言えます。**その時の授業の狙いに合わせて、日用品や自然物、廃材類の材料や素材、もちろん資料となる書籍類も必要です。何をどのように配置して、無意識のうちに生徒に訴えかけるかも教師の仕事であると考えます。



宮城県美術館

創作室



教育普及(ミュージアム・エデュケーション)とは、美術館や博物館で展示と並行して行われている、美術や文化を主体的に学ぶことを支援するための様々なプログラムのことです。各地の特色ある企画によって、ミュージアムへの関わり方は多様になっています。今回は、宮城県美術館に設置されている「創作室」について、教育普及部の細谷さんにお話を伺いました。

ものづくりのできる美術館を目指して。

宮城県美術館は一九八一年に開館しました。当時は「教育普及」という考え方が広まりつつあった時代で、当館も総合アートセンターのような様々な活動ができる美術館を目指していました。創作室の設置は開館準備の段階から決まっていました。

この創作室は、美術館の開館時間中は常に開放し、誰でも使えるアトリエとして広く利用されています。ものづくりをする人が使いやすいように設計されていることに加え、室内には各種の道具から感光器や版画用のプレス機、溶接台などの大きな器材も設

置されています。またスタッフが常駐しており、美術や美術館に関する質問や相談にお応えしています。

ワークショップがヒントとなることも。

一カ月に一回程度、スタッフや外部講師によるワークショップを開催しています。油絵や木工、版画など手法は様々ですが、作品を持ち帰るといったものではなく、ものづくりをしている人への作品づくりのヒントになる内容を目指しています。例えば学校の先生も、授業のアイデアが出ない時などに一人個人として美術館に行ってみるといったことが選択肢になるとよいなと思います。

教育の現場にも寄り添う創作室。

創作室のスタッフは、美術館での教育普及活動全般を担っており、鑑賞活動のサポートなども行なっています。創作室には授業づくりの相談に来られる先生もいらっしゃいますので、その際は、来館の目的や滞在予定時間などを伺いながら、どのような授業づくりができるかを先生と一緒に考えます。例えば、展示室で彫刻を鑑賞して、そのあとに創作室で粘土を使って創作するというような、鑑賞と表現が一体となった活動を提案することもあります。学校の教室での授業だけでは難しい、幅広い活動が可能です。スタッフに

は教員経験者もいますので、学校での図画工作・美術の授業づくりについても、創作室を活用していただけたらと思います。近年は学校の先生向けに鑑賞教育の研修も行なっています。図画工作・美術の専門ではない先生の参加もありましたし、参加した先生が後日、児童や生徒を連れてきてくれたこともありました。徐々にではありますが、美術館に足を運ぶきっかけを提供できている気がします。現在は、学芸員の世代交代に伴い、近隣の先生方と新たに関係づくり始めている段階です。初期からの教育普及の方針をしっかり引き継いで、今後もより効果的な活動をしていきたいと考えています。

見ているだけでも
創作的意欲を刺激する道具たち。
ある意味、常設展のようなもの。



最初にオリエンテーションを受けたら、あとは自由に利用できる創作の場。



電動帯のこぎり、万力、グラインダーなど多種多様な器材や道具を備える。

創作室に備えられた粘土槽。教室ではできないダイナミックな体験も可能。



ほそやみう
細谷美宇

宮城県美術館
教育普及部
学芸員



宮城県美術館

宮城県仙台市青葉区川内元支倉 34-1
TEL.022-221-2111(代)
022-221-2114(創作室直通)
<http://www.pref.miyagi.jp/site/mmoa/>

図画工作、美術の授業で学んだ内容を生かすことで、どんな世界が広がり、どんな未来が描けるのでしょうか。各地で活躍する高校生にスポットを当ててご紹介する「ラフスケッチ」。今回は、和歌山県の写真強豪校で写真甲子園に青春を捧げ、見事に念願の優勝を果たした写真部部長の松下莉子さんにお話を伺いました。



和歌山県立神島高等学校
まつした りこ
松下 莉子さん
Canon EOS Kiss X7を愛用

和歌山県立神島高等学校 写真部

漁港や商店街、農家の方、お祭りなど、和歌山県田辺市内でのロケを中心に活動を行い、文化祭での展示や各種コンクールへも積極的に参加。写真甲子園優勝をはじめ数々の受賞歴を誇ります。

<http://t2kashima-h.kiiminpo.jp/>



写真を撮りはじめて知った光の魅力を、自分が求める最高の一瞬で切り取る。

「写真部にも甲子園ってあるんだ!」。中学生の時、写真甲子園(*)に出場した先輩の新聞記事を目にして、神島高校に入るなら写真部に入ってみたいと思っていました。二年連続で写真甲子園の本戦に出場し、三年目となった昨年は、念願の優勝を目標にみんなで頑張ってきました。

昨年のテーマは「自然」「くらし」「ひと」。三人一組で三日間かけての撮影です。なるべく人物を被写体にしたかったので、私たちは少しでも多くの人と出会うために、普段の部活通り、一人ずつ個別でロケに行くことにしました。撮りたい人に声を掛けることから始まり、様々な話題でコミュニケーションを取りながら撮影します。自然な表情、移り変わる光と影、その一瞬を切り取るのが写真の魅力。最高の瞬間にシャッターを切るために、ノーファインダーで撮ることもあります。

各日の公開審査会には、三人が撮影した写真の中からテーマごとに八枚を選び組写真を制作し、作品の意図や工夫と共に発表します。「くらし」のテーマでは、鉄道が廃線になると聞き、暮らしを支える駅に着目し「Station」という作品にした

こと、被写体を際立たせるためにあえてモノクロにしたことなどを発表しました。出場できなかった部員の分も頑張ろうと思っていたので、表彰式で自分の学校の名が優勝校として告げられた時は、涙が止まりませんでした。

写真を撮るようになって、光や影の美しさに気付くようになりました。校舎の四階から見ると、日が沈む前の光とか、本当にきれいなんです。また被写体とのコミュニケーションを大切にすることで、人の自然な表情や様子を撮影できるようになったと思います。まだ先のことは分からないですが、人が好きなことで、写真部の活動を通して得られたコミュニケーション能力を生かして人に関わる仕事に就きたいと思っています。その中で写真も続けられたらいいですね。



セカンドステージ作品「Station」より
(組写真8点のうち2点)



「Station」全8点の写真はこちらから

*** 写真甲子園**

写真甲子園実行委員会主催の、全国の高校写真部・サークルに対して開かれる大会。全国11ブロックから優秀校18校が選抜され、「写真の町」東川町に集い、本戦大会が開催される。本戦では同一条件下で撮影を行い、全国一が決定される。2017年、大会を題材にした映画が公開された。



画家・建築家 木下栄三

”絵心“とは、伝えたい気持ち。

伝えたいものが見付かっているかどうかということ——

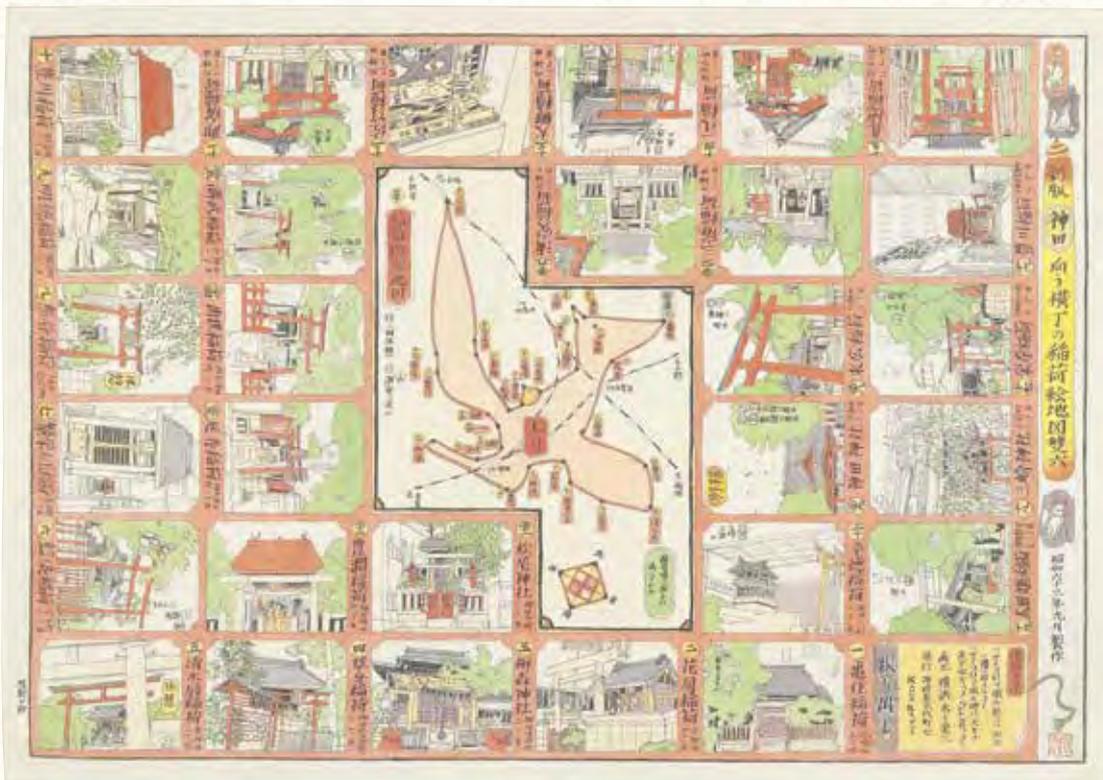
画家で建築家の木下栄三きのした えいぞうさんは、

自身の創作の根っこをそのように語る。

東京神田を歩いたり、江戸の歴史を研究したりして

自身のテーマを探る創作スタイルや

作品に込めた思いを伺った。



神田向う横丁の稲荷絵地図雙六

[鉛筆・水彩・紙／59.4×84.1cm] 1988

木下さんは現在、東京神田に仕事場を持ち、神田をテーマとする水彩画やユニークな絵地図をライフワーク的に描いていらっしやいます。どのような経緯で神田の町に興味を持ったのでしょうか。

僕は元々名古屋の設計事務所に勤めていて、四十年ほど前に、たまたま転勤で東京の神田に来たんです。当時は古い街並みがまだ残っていました。例えば、東洋キネマという映画館には、弁士が立って喋っていた台も残っていたし、神田駅の地下に行くとき、そこでは帽子屋さんがその場で帽子をつくって売っていました。凶案屋というのもあった、店でおじさんが鉢巻きをして凶案を描いているなんて風景にも、興味がわいたりして、すぐに風景を描くのに夢中になりました。会社での仕事はちゃちゃっとすませて、平日もよく絵を描きに行っていました。そうしているうちに、タウン誌の表紙を描いてみないかという依頼がきたんです。

当初、作品を発表する機会や場はあったのでしょうか。

基本的にはありません。人に見せることはありませんでしたけどね。そのやり方は今も変わりません。例えば、煙突を一生懸命探して歩き、集めて描いたら面白いでしょ？という感じです*1。建築

家の藤森照信さんと、作家の赤瀬川原平さん、イラストレーターの南伸坊さん、明治文化研究家の林丈二さん*2らが路上観察学会という活動をやっていたじゃないですか。彼らは、路上で見付けた面白いものについて書いたり、写真を撮ったりした。僕はそれを絵でやりたいんです。絵は、文字で説明を付けることもできるでしょう。伝える手段が自由なところが、自分に合っていると思っています。

モチーフはどのように探しているのでしょうか。

例えば、銀座一丁目から八丁目を歩いてスケッチブックを埋めるぞと決めるわけです。消火栓があったらまず消火栓を描いて、次は面白い提灯があるなど思って、それを描いたとします。それらを組み合わせ描くかどうかという一枚の絵になるかすごくわくわくするんです。絵と自分が動いていることが浑然一体になった楽しさです。描いている中で、脱線することも当然あると思いますけど、そしたらまた違う日に、よし、店の中で一番気に入ったものだけを一つ描いて、店の外観と一緒に並べて描いてみよう、とかね。江戸屋さんという刷毛などを扱う老舗のお店が日本橋にあるのですが、通るたびに中が見えるので、いつか描いてみたいと思っと思っていました。つてを探って、描かせて

いただいて、店のご主人に見てもらったらすごく喜んでくれた。描きたいものがあるときは、そうやって何年もチャンスのを伺うこともある。ひどいときは三、四年待ちますよ(笑)。

絵を描くことに、そこで自分が違う世界に飛び込むといいますが、あるいはこうやったらどうなるのだろうと考える楽しみが常にあります。とにかく描きたいと思うことを集めることによつて違うエネルギーや面白さが出てきたり、そこからまた発展していったり。いつでも歩きながらそういうことを考えているわけです。

木下さんは江戸時代をテーマにした作品を多く手掛けていますね。

ええ。何年か前に江戸文化歴史検定試験の一級を取ったのですが、そのとき試験に向けて、江戸について調べられることは全部調べようと思ったんです。そんな中で、当然様々な江戸時代の地図にあたりました。でも、どの地図を見ても江戸の町へ行つたような気持ちにならないんですよ。だったら自分でつくろうと思ったのがきっかけです。僕は建築もやっているので、図面は引けるわけです。最初につくったのは、江戸時代の江戸城と現在の皇居の位置を重ね合わせた重ね絵図でした。描くに当たって、皇居の周りを徹底的に検証しました。行けない場所もいっぱいあ

りますから、グーグルマップを使ったり、許可を得て遠くから望遠レンズで撮ったり……。皇居を散策するにしても、自分が現在江戸城のどの辺りを歩いているか分かるように描いてからですね。

そんなわけで、重ね絵図と並行して、江戸の風景と現代の風景を融合させた水彩も描き始めました^A。例えば、銀座のプラザタワーや資生堂の前に芝口御門があつて、朝鮮通信使が入つていく……。という絵ですね。この絵には、朝鮮通信使に随行した儒学者の雨森芳洲を描き添えてあります。こうした作品を今まで百点ほど描いています。一つ一つの絵に物語があるんです。

木下さんが絵を描くときに、大切にされていることは何ですか。

“絵心”ですね。絵心というと、絵の心得がある“というように聞こえるかもしれませんが、僕は、絵心つて、伝えたい気持ちだと思ふんです。それが絵になるかどうか、伝えたいものが見付かっているか、ということだと思ふんです。それができれば、あとは技術の問題ですね。例えば、僕は「神田向う横丁の稲荷絵地図雙六」という絵地図を制作しました。この絵は、神田にあるお稲荷さんの位置を線で結んだら、偶然狐の形になることに気付き、それを伝えたいと思って描いたものです。狐が一個できると、ずーっと地図を見な

がら、じゃあ犬に見える組み合わせはないだろうか、十二支に見えるのはないだろうか、と次の発想が出てくるわけです。

僕の作品は、人が見て、びっくりしたり楽しんだり、懐かしんだり、あるいは自分もそれをやってみようと思つてほしいという気持ちが根底にある。でも、普通では喜んでくれないぞという気持ちもある。そうすると、そこへ辿り着くにはどうしたらいいかを考えます。

自分が人に伝えたいと思うことを見つけたら、表現方法を探りながらそれを絵に表すようにしています。

木下栄三／画家・建築家

1950年 名古屋生まれ

東京・神田で建築設計事務所「エーク」を主宰、一級建築士として数多くの建築の設計を手掛ける。その傍ら、画家としても活動。神田の風景や江戸城の歴史に興味を持ち、そこから得た幅広い知見を元に、様々な作品を制作。特に、神田の町の風物を描いた水彩画や、古地図を元に、かつての江戸城と現代の皇居を重ね合わせた重ね絵図などがよく知られる。著書に「絵本かんだ彷徨」久保工務店、「皇居東御苑の草木帖」技術評論社など。

▼木下さんによる、普段愛用している描画材料のスケッチ。パレットの一部を切り抜き、筆洗の代わりにミニボトルを引っかけて使用しているとのこと。



インタビュー動画はこちらから



文中に出てきた作品の一例

A

芝口御門
[鉛筆・水彩・紙
24.2×33.2cm]
2014

18世紀、雨森芳洲の随行で朝鮮通信使が入城した芝口御門に現代の銀座を重ねた作品。





まず見る

第十八回

教科書でもよく見かける、おなじみの美術作品。
見た気、知った気になっても、
いつもと少し視点を変えてみると…、どうでしょう？
まず目の前に見えている要素を丁寧に拾い、
そこから読み解いていくための見方の実験を紹介しています。

鮭図

[油彩・板／85.9x24.6cm] 1879-80
笠間日動美術館蔵（山岡コレクション）
高橋由一 [1828～94]

フォーマット

画面から考えてみる

「画面からはみ出すくらい元気いっぱい描こう」という、少なくとも僕が子どもの頃には定番だったアドバイス、今も使われるのでしょうか。「子どもらしさ」の幻想を強いるところがあるのではや死語かもしれないませんが、そのようなイデオロギー的な問題とは別に、この言葉は、その明るさとは裏腹な苦々しい響きを持っていきます。どこか、不合理なのです。

そもそも往々にして、はみ出さないためにあるのが画面です。ご存じの通り、公募展やコンクールの類には、規格の制限があります。縦何センチ、横何センチ以内に収めること。この制限は、言うまでもなく、描く内容を尊重して決まっているわけではありません。展示場所があふれないように、つまりは展示する側——作品をつくる側ではなく——が作

品をコントロールしやすいようにする、という理由に過ぎないのです。画用紙の四つ切、八つ切、といったサイズにしても、揃っていたほうが扱いやすいから、あるいは、今まで使ってきたから、売っている規格だから、という以上のさしたる理由はないのではないのでしょうか。公平だから？でも、作品の大きさは絵の優劣と無関係でしょう。いずれにせよ、画面は外的な事情から逆算して導かれます。内在的な根拠のないままに。

さて、「教科書に出てくる絵」という言い方のよしあしはさておき（の代名詞、高橋由一の塩鮭の絵。この作品に対しては、近代日本を占う明治という時代の象徴として、特にその写実的な描写について語られるのが定石ですが、ここでは画面に注目してみます。どうしてこんなに、

奇妙なほど極端に細長い画面に描かれているのか（極端に細長い、と感じられるのが重要なポイントです）。仮定その一。由一はまず、吊られた塩鮭の絵を描こうと思ひ、それから、等身大の鮭のシルエットにふさわしい画面のサイズと比率を考えた。その二。当時の日本家屋の床の間を前提に、そこに掛けられる掛軸状の画面を想定し、それにふさわしい塩鮭というモチーフを持ってきた。油絵という技法、ひいてはそれを壁に掛けるという文化になじみがなかった時代状況からして、おそらくは後者の理由が大きかったでしょう。すると、ここでもまた画面は外的に決定したことになるわけですが、環境を判断し、そこに見合うフォーマットとしての形と内容を決定したのは、由一自身に他なりません。そうして、内在的な根拠がつくられた。

むろん、作家が作品の要素を決めることはあまりに当たり前のことです。ところが、絵を見るとときや授業という場になると、とかく画面という条件は不問の対象にされやすいようです。ふだん自分の視野の範囲を意識することがないように、見え過ぎていくからです。画面という広がりやひとたび与えられると、疑問を抱かないどころか、人は進んで「はみ出さない」ように管理され、支配

すらされてしまう。

冒頭の言葉の苦々しさとはつまり、あたかも、図に先立って画面というものがあるかじめ決まっているかのように仮定しているところに由来します。図と画面は不即不離なのに、まるで別物のように引き離してしまっているのです。でも当然ながら、画面もまたつくりだされるものです。いかがでしょうか、絵を見るとときにまずは図を支えている画面から吟味してみれば。そしてときには、「元気がいいように見える画面の形と大きさを考えよう！」と投げかけてみては。

成相 肇 なりあい・はじめ

東京ステーションギャラリー学芸員。
一九七九年生まれ。府中市美術館学芸員を経て二〇一二年から現職。
主な企画展に「石子順造的世界」、「デイスカパー、デイスカパー・ジャパン」、「パロディ、二重の声」など。



文

〈今号のひと言〉……
ほぼ毎日昼休みに同じ喫茶店の同じ紅茶を飲みながら勉強するので顔を覚えられてしまい、注文しなくても紅茶が出てくるようになりました。もはや別の注文はできないようです。

東京ステーションギャラリー「展覧会情報」
「生誕百年
いわさきちひろ、絵描きです。」
（七月一日～九月九日）

Vol.6

ワークショップ

「天王寺コマ撮りモンスター」

■二〇一七年十二月十六日(土)・十七日(日)開催
 ■対象：高校生および高校生と近い年齢の方
 (中学生・大学生も可)



街を舞台に、
コマ撮りアニメーションを
つくってみよう。

どんなふうにかいたら、
リアリティが出せるだろう。

協働することから生まれる
楽しさや面白さがある。

などの物理法則をうまく当てはめて、説得力のある動きづくりを目指しました。

当日は、江口先生のレクチャーを受けた後、「二、三人のグループをつくって子ども美術館のあるあべのハルカスや近くの商店街でロケハンをしました。街をよく観察し「ここにはどんなモンスターが潜んでいるだろう」と想像しながら、撮影場所を選びテーマを考えます。そしてワークシート「モンスター図鑑」(二九ページ下のQRコードからダウンロードいただけます)を基に、モンスターの形や性格を決定。そのモンスターがどんな動きをするのか、どんなふうにつくれば表現したい動きが出せるのか、江口先生やスタッフと相談しながらダンボールを使って制作しました。

モンスターができたら、いよいよ撮影です。iPadを使い、実際の場所でのアングルを確認しつつコマ撮りコマ撮っていきます。引力や作用・反作用

最後に、撮影したアニメーションをみんなで鑑賞し、意見交換を行いました。「モンスターを少しずつ動かしては撮るといふ作業は地道で大変だったけど、その分達成感があった」「おのこのアイデアを出しあって一つの作品をつくるのができて、楽しかった」などの意見が聞かれました。自分たちでやってみることで、コマ撮りアニメーションが身近になるとともに、チームで活動することの面白さも体験できたのではないのでしょうか。

また、同行した学校の先生方からは「役割分担しながら主体的に取り組んでいる姿が印象的だった」「意外と取り組みやすかったので、グループワークとして、ぜひ授業に取り入れてみたい」などの感想をいただき、映像メディア表現の題材を授業で扱うよさの一つは協働できることだと改めて感じました。

今回のように、生徒にとっても、また先生方にとっても新しいきっかけづくりとなる企画を今後も提供していきたいと考えていますので、どうぞご期待ください。



work procedure



5

仕上がったコマ撮りアニメーションの鑑賞会。それぞれ個性があって面白い!



4

グループで協力して撮影を進めます。現場に出る前に試しに撮影をし、動きを確認しておくのがポイント。



3

出したい動きのシミュレーションをしながらモンスターを制作します。



2

みんなでロケハン。撮影場所やテーマを決め、どんなモンスターにするか考えます。



1

講師の江口先生から、コマ撮りアニメーションの仕組みについて、レクチャーを受けます。



実際に街に出ることで、
面白いアイデアが
生まれたよ!



こうやって
もっとリアルな動きに
見えるんじゃない?

1日でモンスターの
制作から撮影まで。
みんなの力作は
下のQRコードから
ご覧いただけます。

「こども美術館 スカイミュージアム」では、
小・中・高の造形活動を紹介する展覧会や
ワークショップなどを行うことにより、
人と人が出会い、学び合える場を提供しています。



こども美術館 スカイミュージアム

大阪市阿倍野区阿倍野筋 1-1-43

あべのハルカス 27 階

TEL・FAX：06-6690-0907

E-Mail：info@kodomo-sky.jp



今後の予定 詳しくは <http://kodomo-sky.jp> をご覧ください

◎ 常設展示

水～金曜日 13:00～19:00、土日祝 11:00～17:00、月・火曜日休館
(特別企画がある場合は、開館時間と休館日が変更になる場合がございます。)



ワークショップ
作品集



モンスター図鑑
ワークシートは
こちらから



江口先生の
デモ版アニメ





iPhone アプリ 中学美術先生のためのABC

×「開発総合監修者」

どうすれば、もっとよい授業ができるのか。
先生の自信につながるアプリへ育てていきたいと思えます。



東京造形大学 非常勤講師
元神奈川公立中学校教育研究会
美術科部会 会長
かわい かつひこ
川合克彦 先生

美術学習に「なるほど!」を

美術の授業というものは、教師としての力量が増し、生徒とのコミュニケーションが上達するに従い、優れた作品づくりへと向かわせてしまいがちです。事実、私自身もそうでした。何を学ぶための授業なのか、何のために美術学習はあるのか、肝心なところがふと抜け落ちてしまうのです。そんな時「そうか!」「なるほど!」と改めて気付くためのヒントとなるようなアプリになってほしいと思い、開発に携わらせていただきました。

日々、よりよい授業を模索している先生たちに、生徒の学びがより深まる視点を提供できるようなマンガや解説文となるよう心がけています。ですから、実際の中学校の美術の授業の中で起こり得る現場感を大切に、私自身の経験はもちろん、全国の中学校の授業や作品を見渡す中で陥りやすい勘違いや失敗例なども参考に、コンテンツへと反映させています。

答えは生徒たちの表情に

特に地方の教育現場を見てみると、孤

独感を抱え、情報不足などに悩む美術教師の厳しい現状に直面します。少ない授業時間の中、子どもたちのものの見方や考え方、また他者の価値観を受け入れる柔軟性といった数値化できない資質を育てていくためにできることは何なのか—。そのポイントを再確認するとともに、「答えは、目の前の生徒たちの姿の中にあるよ」と気付きを与えることで、先生たちの背中をそっと

押しつけて自信へとつながられたら幸いです。

日本文教出版が全国各地で開催している美術教育セミナーでいつも伝えていることですが、一人で抱え込まずみんなで一緒に考え、成長していくことが大事です。アプリの中のマンガに出てくる井澤先生に自らを投影してみてください。あなたの隣でも「ミュズ」が語りかけてくれるかもしれません。

全文を日文Webサイトで近日公開予定!

日文 中学美術

検索

無料

ひとりじゃないんだ!! 先生方のサポートアプリ!!

中学美術先生のためのABC



ダウンロードはこちらから

QRコードかApp Storeで「先生のためのABC」を検索してください。

○推奨環境 iOS : 8.0, 9.0 / 端末: iPhone6, iPhone6S

ご利用の際にはインターネット通信環境が必要です。

※OS、端末のバージョンアップ等によりご使用できない場合があります。

Download on the
App Store



Apple, Apple のロゴ、Apple Pay, Apple Watch, iPad, iPhone, iTunes, QuickTime, QuickTime のロゴ、Safari は、米国および他の国々で登録された Apple Inc. の商標です。iPhone の商標は、アイホン株式会社のライセンスにもとづき使用されています。App Store, AppleCare, iCloud は、Apple Inc. のサービスマークです。TM and R 2017 Apple Inc. All rights reserved.



(「造形のABC」p.21より)

ABC PICK UP

子どもの思いに身を重ね、先生に寄り添うABCシリーズ。
4コマ漫画とともに、子どもや図画工作について楽しく学べる
同シリーズより、今回は「造形のABC」の4コマ漫画から紹介します。

※このコーナーは、著者が選んだ4コマ漫画に、新たに書き起こした文章を掲載しています。

感じ取ること

「鑑賞」と聞くと、すぐに「見ること」が浮かんできます。でも、図画工作・美術でいう「鑑賞」は、感性や身体性が働く活動のことです。ですから、感じ取り、味わうことが「鑑賞」といえます。そして、この鑑賞は「表現」と一体的に育成されます。

例えば、絵に表す題材で「見る力」「観察力」を育てることに限定すると、見たままを再現するような絵を求めることになります。でも、子どもは、外面的なものや目に見えるものだけを捉えようとするのではなく、イメージしながら見る力を持っています。ですから、おはなしを聞いただけで、イメージする楽しさを味わったり、木片に目や口の印を付けただけで、その木に命を吹き込んで自分の物語をつくりだしたりすることができるのです。

鑑賞の活動の充実には、先生自身の感性も必要です。指導は「子どもの感性を否定しない」「全てを受け入れる」という姿勢からしか始まりません。子どもの目線の先にあるものを一緒に寄り添い見つめてみましょう。

ABCシリーズのラインナップ



ABCシリーズは公式Webサイトで全編をお読みいただけます。
また、冊子をお送りすることもできます。



著者紹介
あべひろゆき
阿部宏行

1954年生まれ、北海道教育大学岩見沢校教授。中央教育審議会 初等中等教育分科会教育課程部会 幼児教育部会委員、同 芸術ワーキンググループ委員(平成29年)、文部科学省「学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等協力者主査(小学校図画工作)」(平成29年)などを歴任。

小・中・高を通して「図画工作・美術」の教科書をつくっているのは、日文だけ。これからも「図画工作・美術」を応援します。



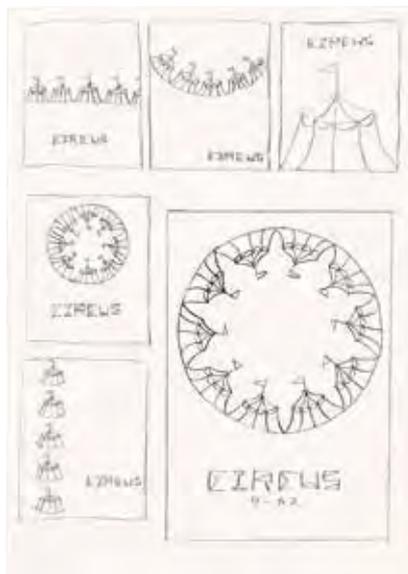
小学校図画工作教科書



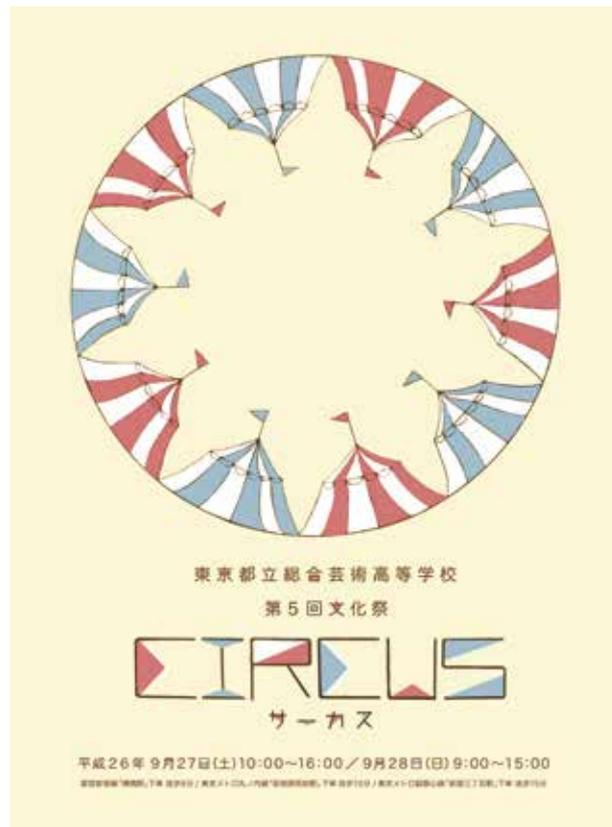
中学校美術教科書



高等学校美術教科書



モチーフの配置を検証するためのスケッチ



高校1年 文化祭のポスター [アクリルガッシュ・シルクスクリーン・紙/59.4×42cm]
平成29年(2017年)度版 高等学校芸術科美術I教科書「高校生の美術1」 p.73掲載

多くの高校では文化祭に向けて「標語」を決めています。これは、その標語を基に発想を広げ、情報や条件を整理してポスターに表し、文化祭開催を校内外に周知しようとした作品です。

この年の標語は「サーカス」。「サーカス」というワクワク感のある言葉と、それを表すポスターのデザインは校内公募・投票で決まりました。

作者は、サーカスの語源に「円」という意味があると知り、文化祭を共につくりあげる楽しさを、サーカスのテントを円形につなげる形で表しました。テントの上の旗のモチーフは、標語の文字デザインにも生かされています。

このテントのモチーフは、文化祭当日の校内装飾や、プログラムのパンフレットにも生かされました。ポスターが「サーカス」という標語の視覚的なイメージのよりどころとなり、生徒たちは力を合わせて文化祭装飾をつくりあげることができました。

標語を基にポスターをデザインし、そのイメージを校内装飾やパンフレットのデザインに生かす。このトータルデザインの考え方が文化祭の一体感をより強めたように思います。

あなたは、どう思いますか。

形 forme No.315-2018

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成30年(2018年)6月18日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33403

制作：株式会社 東京矢印

日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18・B
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690